1-9		主題	特養からの在宅復帰・在宅生活の支援	
在宅・入所相互利用		副題	「在宅・入所相互利用」の実践報告	
在宅復帰				
研究期間	4ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 世田谷区立きたざわ苑	
発表者：齊藤 貴也（さいとう たかや）			アドバイザー：	
共同研究者：				
電話	03-5453-5620	メール	kitazawa@shoukichi.org	
FAX	03-5453-5621	URL	www.shoukichi.org/kitazawa/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設は、公設民営にてH13年4月に開設され、特養100床、ショートステイ25床、その他デイサービス、訪問介護、訪問看護、居宅支援事業所などの在宅サービスを併設しています。立地としては、世田谷区の北東に位置し、下町情緒にあふれる住宅地の中にあり、地域住民の方々にご理解やご協力頂きながら、地域に根付いた施設運営を行っています。
------------------	---

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>当施設では約400人の入所待機者がおり、世田谷区においても2,000人以上の要介護高齢者が特養への入所を希望しています。しかし、そのような特養待機者やその家族の多くの方々は、心から特養入所を希望しているわけではなく、「できれば、家で住み続けたい」、また家族にとっては「家に住ませてあげたい」という思いがあると感じています。</p> <p>そのような状況の中、H18年の介護保険法改正の際、特養の加算事業として、施設、在宅の連携したケアマネジメントにより、施設入所せずに在宅で生活し続けることを目的とした「在宅・入所相互利用」（以下、相互利用と言う）が創設され、当施設でも同年の8月から相互利用の事業を開始いたしました。</p>

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>相互利用は、在宅の利用者が3ヶ月を限度とした特養入所を行い、その入所中に自立性の回復を行い在宅復帰し、その後も繰り返しの入所によって、施設と在宅を行き来しながら特養への長期入所をせずに在宅生活の継続を支援することを目的としています。また、制度上では要介護3以上の利用者が対象となり、同一の個室ベッドを複数の方々（2～3名）がシェアすることから、ホームシェアリングとも言われています。この取り組みでは、施設の自立支援ケア、相談員の在宅復帰に向けたソーシャルワーク、そして施設、在宅サービス間での協働が重要となります。相互利用の取り組みによって、特養という介護の専門施設の役割を果たし、在宅で暮らし続けたいと思う利用者、家族の希望を実現し、その結果、特養入所待機者数の減少に繋がることを狙いとして事業展開を行っています。</p>

《具体的な取り組みの内容》

①自立支援ケアの実施

相互利用による2～3ヶ月の入所中には、在宅における家族の介護負担を失くすよう、身体能力の向上や認知症の改善といった、集中的な自立支援ケアを実施します。当施設では、以前より自立支援ということをやケアの目的としており、H21年1月には全ての特養利用者に対し「おむつゼロ」を達成いたしました。その自立支援ケアを短期間の入所中に集中的に行い、在宅復帰に向けて利用者自身の自立性の向上を目指しています。

②相談員の家族アプローチ

利用者に対する自立支援と同時に、相談員は在宅ケアマネと連携しながら、家族に対して在宅復帰、在宅生活継続のアプローチを行います。家族と頻回に関わることで信頼関係を築き、家族が抱える在宅介護における問題や不安を分析し、それを解消できるようなアプローチを行っています。

③施設、在宅サービスの協働

在宅生活の継続の為に、相互利用により利用者の自立性が回復したとしても、在宅復帰後の在宅サービスにおいても、施設で行ったケアと同様のケアを提供する必要があります。その為、入所前、退所後には在宅ケアマネと施設相談員と一緒に自宅訪問を行い、入所中には週1回「事業所間連絡会」を開催し、特養、在宅サービスの全事業所職員が集まり、職員間での情報共有を行い、ケア方法の検討やサービス調整の打合せを行い連携強化を図っています。

《取り組みの結果と評価》

H18年の開始時から4年が経過し、当初の2ベッドから6ベッドへ増床し、現在は13名の利用者が相互利用により、施設と在宅を行き来しながら、特養入所せずに在宅生活を継続しています。利用されるほとんどの利用者は開始当初は、特養入所を強く希望していましたが、在宅生活の維持に向けた支援の結果、特養入所ではなく、どのようにすれば家で暮らし続けられるかという考え方に变化されています。実際に相互利用を4年間利用している家族から、在宅介護が大変となり相互利用を開始された当時のことを振り返り「何とかして施設に入れればと思っていましたが、あの時相互利用を利用して本当に良かったです。今はもう施設に入れることなど全く考えていません」と話されています。

《まとめ》

特養入所を希望される方々には2つの群があり、一つは生活環境、経済状況、家族の介護力の問題などで入所せざるおえない方々と、もう一つは利用者、家族はいつまでも自宅で生活したいと考えているにも関わらず、利用者の認知症の悪化や排泄等の介助が重度化することによって、施設入所意向となった方々がいると思います。そして4年間の取り組みの結果、後者と判断できる利用者、家族に対しては、相互利用による自立支援ケアと施設、在宅サービスの協働によって、特養に入所せずに住み慣れた在宅で暮らし続けることを実現できていると考えています。

《提案と発信》

「利用者本位」や「その人らしく生きる」ということの本当の意味は、住み慣れた地域や家で暮らし続けることだと考えています。その為、介護の専門施設である特養は、その機能を有効的に活用し利用者の自立性の向上に努め、あくまでも在宅で住み続けることを主眼においた支援を行い、「特養に入らなくてすむ特養」というものを目指していきたいと考えています。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。